

「最大多数の最大幸福」をめぐって

研究員 一ノ瀬正樹



武蔵野大学しあわせ研究所では、三鷹サテライト教室での特別講座「しあわせを考える～学問からみる様々なカタチ」を2018年10月より毎月1回、6回にわたって開講する。昨年に引き続きの特別講座となるが、今年度の第1回目として、『「最大多数の最大幸福」をめぐって』というタイトルで10月3日にお話した。

本講義では、いわゆる功利主義のスローガンである「最大多数の最大幸福」という考え方を軸に、倫理的問題についての思考法について解説した。まず、私たちの社会には、安楽死や死刑問題などのように、賛否いずれの側にも相応の理がある、「正 vs. 正」という倫理的対立がしばしば現れること、そしてそうした対立をどう説明し対処していくかという点で、倫理学が求められることを示した。次に、倫理学の標準的な学説として、行為の動機に善悪の基準を置く、すなわち道徳的義務に基づいた行為を善しとする義務論的思考方と、行為の結果に善悪の判断基準を置く、すなわち社会全体の幸福を増大させる行為を善しとする功利主義（大福主義）的発想の対比を導入しつつも、今日の展開においては、そうした対比は必ずしも成り立たないことを説明した。どの選択肢を選びたいと思うか、という「選好」に基づいた「選好功利主義」が R.M.ヘアなどにより展開されていて、それに従うと、動機を重視する考え方を人々が選好するならば、選好功利主義的に義務論が採用されるので、義務論と功利主義（大福主義）という対立は消滅してしまう、ということである。功利主義（大福主義）に対しては、一人の健康な人を犠牲にして多数の患者を助けるといっ

た方策が正当化されてしまうのではないかと、いうお決まりの批判があるが、「選好功利主義」を取るならば、そのような方策を採用することを人々が選好しない以上、そのような直観に反した方針は採用されない。そして、こうした選好の充足も幸福概念に含めるならば、行為の結果が、社会全体の幸福を増大させたり、不幸を減少させたりする点への着目は、私たちの生き方の指針としてきわめて普遍的であることが分かる。実際、2015年9月の国連サミットで採択されたSDGsなどは、貧困や飢餓やインフラ整備などに着目した仕方で未来世代の幸福を提唱していると解釈できる。

むろん、「幸福」とは何か、というのは困難な問いであり、個人の主観も関わるので確定しがたい。けれども、「幸福」になるための必要条件はある程度輪郭づけることができる。その核は、水、電気、ガス、道路などのいわゆる「インフラ」であろう。それらが整っていなければ、そもそも「幸福」にはなりえない。それさえ成り立っていれば「幸福」になれるわけではないとしても、インフラの充実は「幸福」の必要条件なのである。こうした功利主義（大福主義）的文脈で「幸福」を問題にするとき注意すべきは、ここでの「幸福」は社会全体の「幸福」であって、個人の「幸福」だけに焦点を当てたものではないという点である。この点で、功利主義（大福主義）は利己主義とは根本的に異なる。また、インフラの充実への着目からも分かるように、功利主義（大福主義）は「量」的思考を重視する。たとえば、水道設備は、その社会に「あるかなしか」ではなく、「どのくらい普及しているか」が問題なのである。けれども、では、幸福の「量」を測定するときの単位は何なのか、国なのか、人類なのか、動物も含めた生物なのか、といった問題は残る。シンガーの動物解放論やベジタリアニズムの考え方を紹介しながら、功利主義（大福主義）に内在する、こうした単位の問題を示唆して講義を終えた。